

松阪の清光寺 (伊勢シリーズその1)

大正大学教授 玉山成元

伊勢の松阪駅(三重県)で下車。駅前広場から大通りを直進すると、すぐ右手に清光寺の屋根が見える。山道の入口左手に、祐天上人のお名号を刻んだ石柱が立っている。正南には「南無阿弥陀仏 大僧正祐天(花押)」とあり、左右の側面には「十万人講清光寺」とあり、台石に「是ヨリ一丁」と刻まれている。『蓮門精舎旧詞』によると、清光寺の開基は行基菩薩といい、もとは真言宗であった。ところが大永三年(一五二三)超誉察道上人が中興して浄土宗となった。天正十六年(一五八八)松が嶋から日野町に移り、元禄年間(今の中町に移った。『祐天上人御利益記』によると、正徳三年(一七一三)ごろ清光寺二十三世の幡貞上人は、十万人に日課念仏をさせる願を起こした。そして日課念仏を誓った人々には、祐天上人のお名号を与えて本尊とすることをすすめた。名号札には「授勢州松阪清光寺日課百遍十万人衆了(壺印)増上寺大僧正顕誉祐天(花押)」とある。これによってわかるように、幡貞上人のすすめた念

仏は、一日に百遍称えさせることであった。法然上人は六万遍から八万遍、祐天上人もそれに近い遍教を称えたと思われるが、在家の人々に「三千遍や五千遍称えろ」といっても無理である。百遍の念仏なら現実的である。しかも生き仏として上下の尊崇を集めている祐天上人と縁を結ぶるといことは、大変な魅力であった。幡貞上人はおそらく自分の授かった名号を板刻したのであろう。それを念仏者に投じたに相違ない。こうして幡貞上人の目的は達成された。これがきっかけとなって以後、念仏講が組織され、十万人講と名づけられた。だから、念仏者の実数はこの数倍にのぼるだろう。近在の信者が寺を訪ねることも多くなった。石柱の土台に「これより一町」(約一〇メートル)で十万人講清光寺に至ると刻んであるのは、往来する信者の道しるべで、「これより二町」とか「これより三町」とか、里数の違う石柱が方々に立てられたのかもしれない。大部分は不明になったが、幸い門前のものが残ったのであ

ろうか。明治三十三年(一九〇〇)清光寺は火災にあい、山門・鐘樓・九品院を残して焼失した。本尊は明治の末に京都の妙心院三十三間堂から迎えられた。すばらしい弥陀三尊で、定朝様式を伝え、国の重要文化財となっている。桧材の寄木造りの上に漆箔をおいたもの。座高は八七センチ、均整のとれたお姿で来迎印を結び、慈悲深いまなざしで静かに衆生を見つめる態度には、尊い品格がただよっている。脇侍の観音菩薩は蓮台を持ち、勢至菩薩は蓮華を持っている。上にも跪坐像であるが、像高は七〇センチ。阿弥陀さまの前に出て、すばやく念仏者を西方浄土に迎えようとする姿が実にすばらしい。本堂に入るといかにいわれぬ落ちつきが出て、自然と三尊仏にひきつけられる。私はご本尊を拝ませていただき、旅の疲れもふつとんでしまった。浄土宗の宗室にもれているのが不思議である。どうした手違いであろうか。

清光寺には祐天上人お名号の護符がある。タテ二センチ、ヨコ五ミリのもので、

松阪の清光寺 (伊勢シリーズその1)

大正大学教授 玉山成元

薄い和紙に木版ずりのもの。十枚ほどつながっている。護符の包紙には「除病拝服名号」とあり、「松阪市清光寺奉賛会寺務所」の朱印がおしてある。さらに三折の内側に注意として「此ノ名号ヲ清水ニ浮べ、南無仏ト十遍称工、病氣平癒ヲ祈リツツ拝殿イタシマス」とある。きれいな水に浮かべて飲みこむものである。この名号護符と、ほとんど同じものが京都百万遍知恩寺にもある。もともとは祐水上人が毎月十五日に知恩寺で百万遍念仏を行い、そこに集った信者に護符を投げたという。これは昔から「厄除名号」として善男善女から感謝されていたが、最近はこの護符があることすら知られていない。しかし、京都大学の医学部の先生方が外国旅行をするときには、水あたりの妙薬として必ず持参するという。科学の先端をゆくお医者さんが持参するのは不思議な気もするが、ききめは抜群らしい。

医学の進んだ現代でも、病気は一番恐れられている。どの病院も、患者さんで

いっぱいである。まして二百年も前であれば、どんなに病を恐れたか想像できる。その現実をみつめて念仏布教にとり入れた効果は大きい。清光寺では、今でも「御宝号」として祐天上人よりいただいたお名号を版刻して信者に与え、病める人々には護符を授けていた。これによって今後も人々の心が和むことを祈りたい。